

光格上皇修学院御幸に新造された四方輿

葵祭齋王代の腰輿

藤原重雄

Non-walled Palanquin Built for Retired Emperor Kōkaku's Visit to the Shūgakuin Villa : The History of the "Oyōyō" Used by the Saitō-dai in the Aoi Festival
FUJIWARA Shigeo

はじめに

- ① 『集古帖』に収められた図の全体構成
- ② 四方輿の図と京都御所の御腰輿
- ③ 光格上皇修学院御幸の四方輿
- ④ 考証資料と絵師の関与
- ⑤ 光格上皇初度の修学院御幸の網代輿
- ⑥ 聖護院門跡の網代輿
むすびにかえて

【論文要旨】

『聆涛閣集古帖』（以下、『集古帖』）に収められている模写・拓本は、基本的に江戸後期においてすでに「古」と認識されていた対象を写したものが大部分である。しかしながら、二帖ある「乗輿」のうち「乗輿一」帖で、かなりの部分を占める輿（四方輿）の図は、他の古物の模写・拓本とは趣が異なり、明らかに同時代性を示している。

『集古帖』の注記や貼り込まれている文書目録を手がかりに、『修学院御幸録』の記事を探ると、光格上皇の七度目の修学院御幸に向けて、文政十二年（一八二九）三月に完成した四方輿「菊八葉」の意匠検討に関わる一括の史料群と判明した。

この四方輿「菊八葉」は、それまで用いられていた網代輿に替わって「山輿」として新造されたもので、竹屋光棟・原在明らの考証にもとづく復古的な態度で意匠が定められた。その際、絵巻などの古図のみならず、やまと絵師たちによる輿の原物の実測的な調査が参考資料とされた。この四方輿は現存し、京都御所に保管される「御腰輿」で、毎年五月の葵祭（賀茂祭）で齋王代を勤める女性が乗る輿としても用いられている。

四方輿「菊八葉」新造に先立って、文政七年の光格上皇初度修学院御幸に際しては、網代輿が新造された。京都御所保管の網代輿がこれに該当し、「唐八葉」の文が施されている。この盛儀は記録画とされ、輿は中心モチーフとしてその記憶を伝えるものとなった。

さらにこの京都御所の「唐八葉」網代輿に酷似する網代輿が、聖護院門跡に所蔵されている。これには「菊二重」文があり、光格上皇から実弟の盈仁法親王に下賜されたもので、おそらくは光格上皇が讓位後の御幸始に用いたものに相当する。

寛政度の内裏再興に復古的な考証が基礎とされたことは周知であるが、それに続く文政期の四方輿新造においても、復古的な考証を志向して意匠が定められた。この事例は、考証の内実をうかがい知るとともに、好古の嗜好は具体的な事業と結びつき、当時の政治とも密接な関係にあったことを示している。

【キーワード】 四方輿、網代輿、光格上皇修学院御幸、復古、京都御所